

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年八月二日 横浜定例講演会より

『 黄金の扉を開け 』

扉を開く為に
必要なもの

師 今日皆さんのお一人お一人
が持っている心の扉、各人の『黄金
の扉を開け』という題名でお話をさ

せて頂きます。今まで色々なお話をさせて頂きました。「朝日を浴
びよ」とか「窓を開けて綺麗な空気を入れなさい」とか、「大神様
のお言葉は一言一句魂で聞け」とか、色々な話が出たと思います。

皆さんの頭の中に知識としては沢山入っている。そういったこ
とは私の一番嫌いなものです。知識としてはいっぱい入っている。
そして現代の世の中を罷り通っているのはこの知識でございませ
いわゆる知っているかどうかというテストです。

頭の良い人というのは、よく知っている人だという。しかし、
頭の良い人と言われていた、今までよく知っている人というのは、
段々と役に立たなくなってきた。何故かと言うと、コンピュータ
ーをポンつとやれば一辺に全部出てくるんですから、その人に訊
かなくてもよくなったのです。

残暑

お見舞い申し上げます



藤原大士
藤原美津子
吉田洋子

若林常次
野村エツコ
日高ひさ子
貝津良子
宇佐美輝洋
吉森英次
井上智司
藤原康紘
目黒正彦
貝津貴雄

昔はこういう人がいると、「何でもあの人に訊けば、あの人なら何でもよく知っているよ」という感じでよかったですよね。今は聞かなくても良いのです。コンピュータをぼんつと押せば全部回答が出てくるんですから。頭の良い人と言われていた知識がまったく世の中の役に立たなくなってきた。

人ならではの 考える力

ここで大事なのはやはりコンピューターターでは出来ない、人の考える力だ。それはコンピュータでやって

も考える力が出てきませんからね。人が考える力は大事です。まさに私が以前から言っていた、そういう方向にきているのです。しかし日本の学校教育はと言うと、考える力は全くゼロです。そういう勉強方法は何も教えていません。

したがって今の日本人は誰かが勇気を出して、わからないけれど、勇気を出してというのは、本当は、自分はおかしくてはいないのだけれど、「こうだーっ」と言ったら、皆がワーツとそれに付いていくのですよ。「赤信号みんなで通れば怖くない」式で。

それが正しいかどうかはわからないけれど、「皆がやるようにやっておけばいいんだろ」という形です。その先に地獄が待っているともわからない。いや、「赤信号、皆で渡れば怖くない」、怖くないかもしれない。それは心理的に「皆で一緒だから大丈夫」と思っているかもしれないけれど、そこへ赤信号ですからグランプに突っ込まれたら命はないのです。もう直前にそういう死の危険というものがあつたとしても、「皆で渡れば怖くない」と言う。

要するに「何とかなるだろう」とか、「どっちへ行くかはわからないけれど、皆と一緒に安心だろう」と錯覚しているだけなんです。自分の目でよく確かめて、危険であるかどうかということを判断して渡らなければならぬのに、赤信号であっても皆で渡ればなんとかなるだろうという考え方なんです。本当の意図で怖いですよ、これは。

方向性を示し 現実を動かす

逆に言うとう方向性があって、「こゝうなつたらこうなるよ」と言うのではない。今の政治を見てもそうです

よ。小泉さんが「構造改革」と言っても、今迄、散々、自民党の長い政治の中で飽きてきた。だから何かやってくれるんだらうという、その「何かやってくれるんだらう」という、その「何か」に賭けただけです。

小泉さんが「どういふことをやって、こういふふうになるんだよ。こういふ世の中になるよ」と言っているわけではないのです。「構造改革をやりますから」というそれに騙されている。「今迄と何か変わるだろう」と国民が期待しただけです。何も変わりはない。もっと悪くなっている。

そういう世の中です。総理大臣といえども、大臣といえども。竹中さんなんていふのは、優秀な人だと皆、思っていたんです。だけれど、頭だけで何にも役に立たない人ですよ、私に言わせたら。そうではないの。わからないけれど理屈だけは言えるよ。皆より少しは知っているよ。だからこうなつたらこういふふうにして、

ああ、それはこういうふうによればいいんだよという回答は出来るけれど、実際の社会はその通りには行かないのだ。いつも言うように。学校へ行ったら、絶対に教えてくれるのは、「一足す一は二」なのです。そうでしょう。

ところが、男の人一人と女の方一人が結婚しました。「じゃあ二人ですね」。「冗談言うな。うちは五人家族だよ」ということになるのです。子供が産まれるということは前提にないのだから。そうではなしに男性と女性が結ばれて、結びによって生まれた子は「息子」だよ。女性は「比売」と言うから、結びによって生まれた女の子は比売だから「娘」と言うんだよ。

そういう子供さんが二人生まれた、三人生まれたって言うのと、家族は五人ですよ。でも学校へ行ったら、「一足す一は二ですよ。だから、あなたのところはどうかやって二人家族だ」とこう言われたらどうしますか。学校教育ってこういう事をやっているんですよ。産まれてくるということはない。

「一足す一は五つ」だってあるんですよ。これを五にするか十にするかは皆さん次第ではないですか。子供さん何人いるの。お二人の気持ち次第ではないの。中にはゼロの人もあるんですよ。学校に忠実に、「あーっ、子供を生んじやいかん。じゃあ墮ろしましよう」と言って。何時まで経っても二人です。いるんですよ、中には。学校の教育でこういうことをやっているのです。そして、「墮胎しちゃいけない」とか何とか言っても、「そんなの学校で習わなかったんだよ」ということになりかねない。

よろしいですか。この位考える力は何も無い。知っているかどうかだけで。学校のテストも皆、知っているかどうかですよ。知っていて使わなければ何の意味もないのです。私は、何でも知らなくてもやれば体験するんだって、言っているのです。

日本の職人さんの素晴らしいところというのはそういうことで
工夫をすることが大切 すよね。この間も富士山の方をずうっと
周って来る時に、今年の五月に象牙の彫
刻展があつて、そこで最優秀をとられた

方のお家に寄って来たのです。

素晴らしい象牙の彫刻を見せて頂きました。元はと言えば印鑑屋さんだったそうです。六郷町というのは町全体が印鑑屋さんです。はんこ屋さん。はんこ屋さんだけどはんこそのものがもう売れなくなってきた。原料としての象牙が手に入らないという。甲府の方は水晶、六郷町は象牙という。後はほんつげの印鑑。

しかし、これでは先行きが駄目だなあとということで、やはりそれに似た鹿の角であるとか、鯨の歯であるとか、そういうものを取り寄せて色々と研究なされたそうです。しかしその方は同じ六郷町にいても毎日富士山の見える所に引越したのです。疲れたら窓から富士山が見えるんですよ。

芸術を楽しむにして。そして自分でああでもない、こうでもない。まさに創作品を作って、昨年と今年と二年連続で最優秀賞を